

ARTRAMBLE

学芸員の視点 ②③

触っている私を見ないで—

「美術の中のかたち」展をめぐる断章——西田桐子

特別寄稿 ④⑤

画家の教養—橋本閑雪〈失意〉を読む——西原大輔

ショート・エッセイ ⑥

「チャンネル4 薄白色の余韻 小林且典のこと——遊免寛子

トピックス ⑦

「橋本閑雪」展関連事業

「昭和モダン 絵画と文学1926-1936」記念講演会

新収蔵品紹介「信濃橋画廊コレクション」を中心に

出品作家による対談

美術館の周縁 ⑧

横尾忠則W個展——出原 均

風にたなびく旗のようなシルエットの中に、放射状に延びる虹のスペクトル。巨大な画面の前に立つと、目はとらえるべき確固とした形態を失い、遠近感を狂わされます。2次元でも3次元でもない、まるで異空間に開かれたような錯視効果が、この画面にはあるのです。

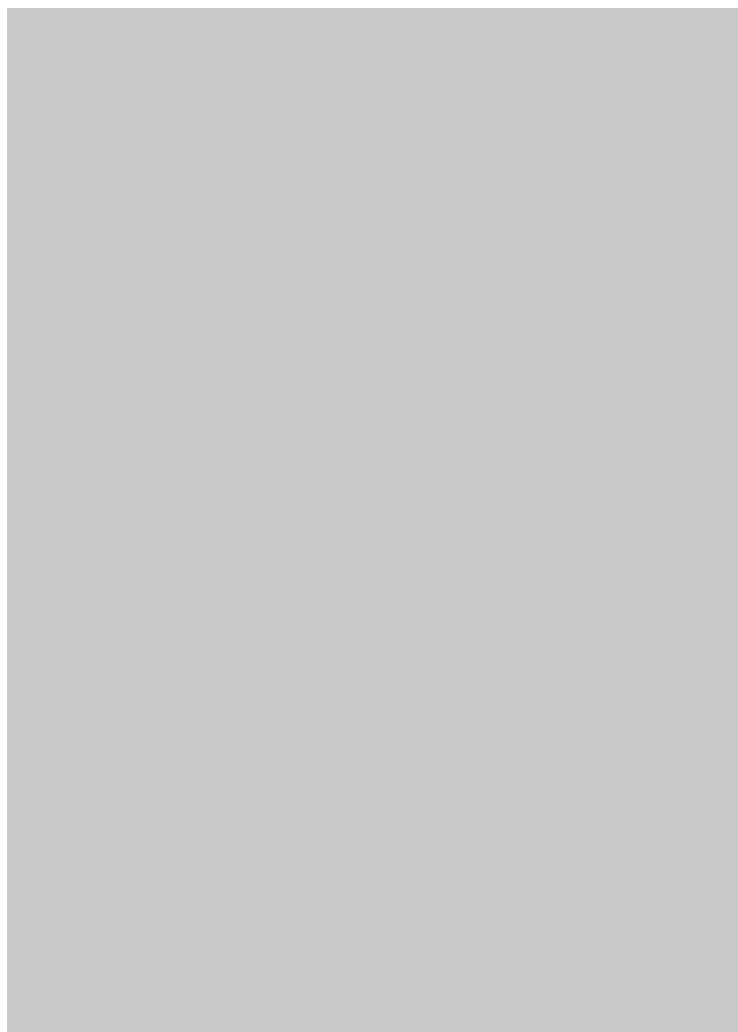
一方で、エアコンプレッサーで絵具を吹きつけて描かれたこの絵画には、作家の生々しい筆跡はありません。使われている絵具は赤、黄、青の3原色と、メタリックに光を反射する銀色のみ。このような機械的な描法に相応しく、タイトルも1974年作の(=M)風景型の(=P)200号キャンバスで、その年の20作目であるという情報を記号化して示したものです。徹底してシステ

ム化した方法によって創りだされた無機質な画面は、禁欲的であると同時に視覚的な遊技感覚を併せ持つ、緊張感のある仕上がりになっています。

大阪に生まれた泉茂は1951年に瑛丸らと共に「デモクラート美術家協会」の結成に参加。さらに59年にニューヨーク、63年にはパリに渡り、各地の美術動向に刺激を受けながら自らの作風を展開させていきました。本作は68年に帰国してから始められた、絵具の吹きつけによる絵画の代表作です。

(河田亜也子／当館学芸員)

コレクションから



泉茂(1922-1995)

〈MP20020〉

1974(昭和49)年

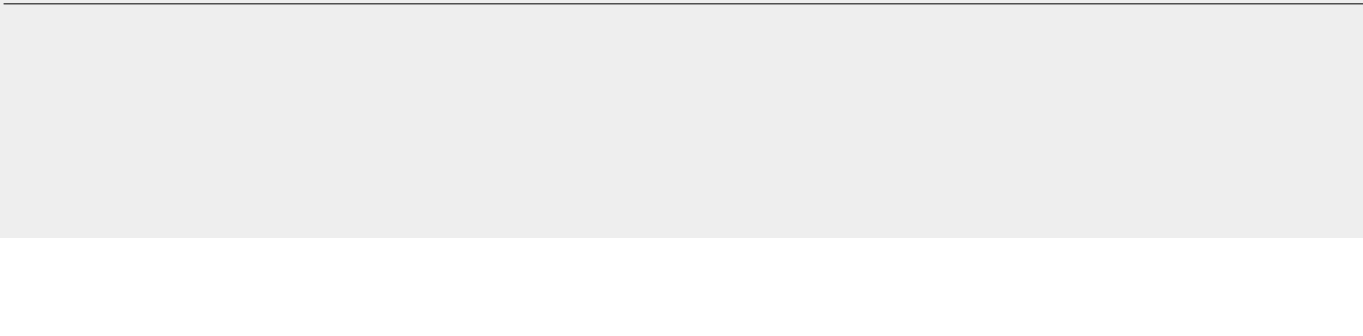
油彩・布

259.0×186.0cm

平成24年度泉照子氏寄贈

画家の教養 ——橋本関雪《失意》を読む

西原大輔



画家は、どのような努力をしたら、良い作品を生み出せるようになるのだろうか。その方法には、二つの方向性があるように思う。一つは、今まで誰も試みたことのないような材料や技術を開発することである。たとえば、近年大人気の画家千住博の滝のシリーズは、画面に絵具を流すことで、極めて魅力的な落水の表現を生み出した。新技法によるみごとな達成と言えるだろう。

絵描きが名作を描くためのもう一つの方法は、多くの本を読み、歴史を学び、世界を旅して、教養を深めることである。たとえ技術面では革新的でなくとも、広く古今東西の文化や歴史に通じることにより、高い見識がおのずから絵に滲み出て、香気あふれる精神性が薫ってくる。千里の道を行き、万卷の書を読んだ体験が、画面に自然と力を与え、えも言われぬ魅力を作品に与えるのである。日本画家橋本関雪(1883～1945)は、明らかに後者の側に属している。そのため、関雪の絵を十分に楽しむためには、鑑賞する側もまた、漢文や日本の古典に通じている必要がある。橋本関雪の作品は、見る者にも高い教養を要求するのである。

2013(平成25)年9月14日から10月20日にかけて、兵庫県立美術館で開催された橋本関雪展には、この芸術家の主要な官展出品作がずらりと揃い、大変見応えがあった。大画面の絵がずらりと並んでいたから、天井の高い大会場で楽しむには十分な内容となっていた。観客は、大きな作品から迫ってくるエネルギーを純粹に楽しむこともできたと思われる。しかし一方で、橋本関雪の絵を味わうためには、画家が題材にした典拠を知っている方が良い。必ずしも「見ればすぐにわかる」絵ではない点にも、関雪作品の魅力があるといえるだろう。

一例として、初期の名作《失意》(1909年)を取り上げてみよう。時は八世紀半ばの唐王朝、日本では奈良時代に相当する時期の話である。玄宗皇帝と楊貴妃の華やかな時代は去り、安祿山の乱や史思明の乱によって唐王朝は混乱に陥っていた。流浪の境遇にあった詩人杜甫(712～770)は、潭州(現在の長沙)で楽人李龜年と再会した。かつては華やかな都長安で皇族貴族の邸宅に出入りしていた二人は、今やすっかり落ちぶれ、遠方の地でめぐりあった。互いの境遇の転変に深く共感しあったことだろう。画面中央が李龜年、右側が杜甫である。

しかし、わたしたちは何の予備知識や解説もないままに、本当にこの作品を十分に理解できるものなのだろうか。画面には三人の大陸風の人物が描

かれている。彼らが「失意」の底にあることは題名から理解できるが、なにゆえに不幸に陥っているのかはよくわからない。唯一の手がかりとなるのは、中央の人物の横に円形の弦楽器が置かれていることである。失意、大陸風、楽器といった要素から、この作品が杜甫(712～720)の漢詩「江南逢李龜年(江南にて李龜年に逢う)」を絵画化したものであると気づくのは、相当な漢籍の素養の持ち主だけだろう。

いや、この詩を知っていたとしても、右の人物が杜甫であると気づかない可能性の方が高いのではないか。漢詩「江南にて李龜年に逢う」には、「正に是れ江南の好風景／落花の時節、又君に逢う」という有名な一節がある。ところが《失意》には、散った花も描かれていなければ、ここが江南地方であることを示すヒントも描き込まれてはいない。橋本関雪は、鑑賞者に何の手がかりも与えないまま、一人芝居のように杜甫の漢詩を作品化したということになる。この画家生来の思い込みの強さが、絵を見る側との対話の通路を狭くしている一面もあると言わざるを得ない。

《失意》を第三回文展に出品したのは、橋本関雪の苦節時代の終わり頃である。画家が《失意》で本当に描きたかったのは、杜甫の故事そのものというよりも、自分自身の長年の苦境の方にあった。父橋本海関(1852～1935)が思いがけない借財をかかえてしまい、家族を扶養できなくなったため、十代の関雪は、他人の家に寄食するみじめな日々を送ることになった。その際少年の慰めになったのは、杜甫のような大詩人でさえ、苦しい流浪の日々を過ごしたという歴史上の事実であったろう。現状が厳しく悲惨であればあるほど、関雪少年は自らの境遇を詩聖杜甫になぞらえ、将来偉大な画家になる切ない夢を膨らませたに違いない。漢詩文の教養こそが、関雪の生きる支えであり、自らを歴史上の偉人に重ね合わせることで、少年は辛うじて苦しい時期を耐え忍ぶことができたのだ。橋本関雪にとって、教養は単なる知的装飾品ではなく、自分自身を支える心の糧であり、人生の中核にある自己そのものだったのである。

《失意》には、杜甫の漢詩「江南にて李龜年に逢う」には登場しない一人の人物が描かれている。左端の後ろ向きの老人は、いったい何者なのか。橋本関雪がこの絵に相当の思い入れがあることを考えると、この老人には、父橋本海関の姿が投影されているのではないかと私は考えている。《失意》は、杜甫の故事を描いた歴史画であるばかりではなく、関雪が自分の苦し



橋本関雪《失意》1909年頃、京都国立近代美術館



かった若き日々と向き合った作品でもある。そのため、絵の中に杜甫とは無関係な人物が描き込まれるに至ったと、私は想像している。

《失意》には、画家自身の満洲での見聞も投影されている。たとえば、杜甫が座っているベッドである。地面から一段高くなった固定ベッドは、おそらく大陸北方の床暖房式の寢床であろう。床には厚い毛皮の敷物や陶枕が置かれ、画面右端には痰壺も見えている。このような調度品は、明らかに大陸北方のものであり、杜甫が漢詩を詠んだ南方の都市潭州のものとは思われない。橋本関雪は1905(明治38)年から翌年にかけて、日露戦争に従軍している。その際に目にした極寒の満洲の家屋の様子が、この絵に生かされたのだろう。漢詩文の教養だけでなく、旅もまた、関雪が作品を生み出す原動力となった。橋本関雪は、故事を描く画家であると同時に、旅によって画囊を肥やした芸術家でもあった。特に、東アジアの大陸には数十回渡航し、二度ほどヨーロッパに遊んだ経験もある。《失意》は、画家の読書体験と旅の経験が生み出した一つの成果である。

しかし一方で、橋本関雪は自らの教養を過信し、教養に溺れた一面もある。彼は、京都の日本画家竹内栖鳳(1864～1942)と極めて仲が悪かった。栖鳳のことを、教養に欠けた、小手先の技術だけで絵を描いている者と考え、心底軽蔑していた。関雪の目には、穏やかな美しい作品で人気を得ている竹内栖鳳が、「教養」に欠けたつまらない画家に見えたのであろう。

確かに橋本関雪は、漢詩文の教養によって鍛えられた画家であったが、同時に、自らの教養を過信し、教養にとらわれてしまった画家でもあった。自らを作り上げた教養が、自らの足枷ともなってしまったのではないだろうか。兵庫県立美術館の展覧会場にずらりと並んだ、故事に基づく大作群を見て私が

考えさせられたのは、画家の教養が持つ意味についてであった。

橋本関雪は、文展や帝展には、漢文や日本の古典に題材を採った大画面の作品を出品した。その一方で、数多くの愛すべき動物画や好ましい山水画を残している。今日、画廊などで購入できるのは、もっぱらこれらの巻物類で、特に動物画は人気があり、値段も高いようである。一方で、山水画に漢文をびっしり書き込んだような掛け軸は、文字を読めない鑑賞者にとっては敷居が高く、敬遠され、値段も安めであるらしい。結局、「見ればわかる」動物画が人気なのである。しかし、橋本関雪の本領は、元来は漢籍や古典に基づく作品の方にあったのではなかったか。

存命中は日本を代表する画家の一人だった橋本関雪だが、残念なことに、いまだにまとまった画集が出版されていない。関雪の代表作の図版を見たい場合は、兵庫県立美術館などで行われた企画展の図録を古本屋で入手するほかない。その意味で、今回の展覧会「生誕一三〇年橋本関雪展」のカタログは非常に重要なものである。

教養あふれる日本画家橋本関雪が、横山大観や竹内栖鳳ほど名前を知られておらず、画集出版の予定すらないとすれば、それは、日本人の漢文の教養が衰微しつつあるせいでもあるだろう。漢詩文の素養にあふれていた関雪の評価は、まさに漢文教養の衰退と運命を共にしているのである。

(にしはら・だいすけ／広島大学大学院教授・詩人)

1967年生まれ。著書に『橋本関雪』(ミネルヴァ書房、2007年)、『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』(中央公論新社、2003年)、詩集に「蚕豆(さんとう)集」「美しい川」「七五小曲集」(七月堂)などがある。

「チャンネル4 薄白色の余韻 小林且典」のこと

遊免寛子

毎年、現在活躍中の作家を紹介している「注目作家紹介プロジェクト チャンネル」、4回目を迎えた今年も、11月2日から12月1日までの約1ヶ月間、神戸ビエンナーレに合わせて無休で開催した。当館で開催された「昭和モダン 絵画と文学1926-1936」展と共にスタートし、「横尾忠則 感応する風景」と共に終了した形である。今回の「チャンネル4」では、彫刻家であり、自らの彫刻を自作のカメラで撮影して写真作品としても発表している作家、小林且典(1961年-)を取り上げ、ひとつの表現にとどまらない作家の今を紹介した。

“チャンネル”という名称は、美術館を訪れる人と、同じ時代を生きるアーティストとがつながっていくことを願って命名された。特別展やコレクション展では限界がある若手から中堅のアーティストの作品を紹介する貴重な機会であり、その会場が展示室ではなく「アトリエ1」という制作の為に設えられた場所であることも本展の大きな特徴である。アトリエ故に、壁には時計や電気のスイッチがあり、隅には大きな銀色のシンクが輝いている。ここが本展の難しいところであり最大の見せ場でもある。今回も、このシンクは作家を大いに悩ませ、そして展示の幅を広げた。展覧会の詳細は、HPや会場で配布したリーフレットに詳しいので参照願いたい。今回は展覧会を機に生まれた、さまざまなつながり=チャンネルについて触れることとする。

たまたま立ち寄った京都の画廊で、小林且典の作品を目にしたのは昨秋のことである。作品のサイズは非常に小さく、手のひらに納まるほどであるにも関わらず、その絶対的な存在感に圧倒された。ブロンズの肌合いの面白さや形の美しさには、イタリアの近現代彫刻に通じるものを感じ、在廊していた作家本人と話していると、東京藝術大学卒業後ミラノに留学し、戦後日本の抽象彫刻の歴史において重要な位置を占める作家のひとりであり当館所蔵作家でもある吾妻兼治郎氏のアシスタントを務めていたという。筆者が大学院時代に研究していた作家が吾妻氏だったこともあり、不思議な縁に大変驚いた。それが最初の“チャンネル”だった。



ブロンズ鑄造講座の様子

次なるチャンネルは、関連事業のブロンズ鑄造講座である。神戸大学発達科学部人間表現学科立体造形研究室の塚脇淳教授の特別協力を得て開催した本講座の実現は、大袈裟ようだが奇跡に近いものだった。近現代の彫刻は、前身の近代美術館が開館した当初から収集と展示の中核のひとつに据えてきたものであるが、ブロンズ鑄造には特殊な設備が必要なことから美術館で行うことは難しい。だが、小林はその鑄造を自らのアトリエで制作している作家なのだ。小林がここに至る背景には日本とイタリアの制作環境の違いがある。彫刻家が鑄造所に滞在し、職人と協力して制作するイタリアの環境は日本にはなく、帰国後、小林は、鑄造所に預けて完成を待つ日本の環境では自らの理想を実現できずにいた。その表現を追い求めて試行錯誤の末に編み出されたのが、自身のアトリエでも実現可能なブロンズ鑄造の方法である。小林は、この方法を活かしたブロンズ鑄造の講座を、横浜美術館や京都造形芸術大学などで指導しており、本展が決まった時から、ブロンズ鑄造講座はぜひ実現させたい事業だった。だが、その実現の為に、内部に煤が付着しても良い大きな電気窯が必要だった。電気窯は通常、陶芸の制作に用いられる。しかし陶芸に用いる窯は、煤が釉薬に影響を与える可能性があるので使えない。素焼きやテラコッタ専用のものか、使用されていない窯が必要だった。特別支援学校や芸術系大学など窯がありそうな場所に声を掛けるも、そのような都合の良い窯は見つからない。諦めかけた時に頭に浮かんだのが鉄の彫刻家として知られる神戸大学の塚脇淳教授であった。事情を話したところ、『それでしたら神戸大学にありますから、出来ますよ』とのこと。今回、神戸大学の特別協力のお陰で実現出来た2日間に渡るブロンズ鑄造講座は、ブロンズの鑄造工程はもちろん、蠟で作った原型がブロンズへと換わる感動と共に、ブロンズの感や重量を実感出来る貴重な機会となった。

そして、つながりは展覧会を越えていく。今回、展覧会の印刷物のデザインを手掛けた須山悠里氏は、筆者が思いもよらない方向へチャンネルを広げた人物である。実は、今回、新開地にある神戸アートビレッジセンターでチャンネル展と一部会期を共にして始まった『Exhibition as media 連沼執太展「音的→神戸 soundlike 2」』のデザインも偶然に須山氏が手掛けていたのである。デザインという面で両展につながったことは望外の喜びであった。

今回のチャンネル展は、多くのつながりのお陰でさまざまなことを実現できた。美術館の人材や資源だけでは難しいことも、外部とのつながりを構築し連携すれば実現できる。この経験をこれからの美術館教育にどう活かすかが筆者のこれからの課題であろう。最後になったが、改めて出品作家の小林且典に感謝を捧げたい。その活躍を心から願っている。

(ゆうめん・ひろこ／当館学芸員)



会場風景

「橋本関雪」展関連事業

「生涯130年 橋本関雪展」では、通例の関連事業に加え、以下のイベントを実施しました。

まずは、講演会。9月22日(日)に国際日本文化研究センター教授の稲賀繁美氏に「橋本関雪の南画における西洋と中国」という演題でご講演いただきました。関雪が古今東西の様々な図像や画法を研究し、制作に採り入れていく過程を、彼が生きた京都の文化的環境や歴史的背景を俯瞰しながら、数多くの図版を用いて1点1点読み解いていかれるお話はとてもスリリングで、関雪の「画囊」の豊かさを知り、ひとつのイメージが作品へと展開されていく面白さを味わうことができた講演会でした。

つづいて10月6日(日)には、白沙村荘橋本関雪記念館理事長で、関雪の曾孫の橋本眞次氏によるギャラリー・トークを行いました。関雪のお身内ならではの視点から、一見ただけではわからない、関雪が絵に込めた想いやメッセージなどをじっくりご説明いただきました。当日は200名もの方がご参加くださり、会場は最後まで熱気に包まれ、関雪の絵画世界を堪能できたイベントとなりました。

10月12日(土)には、「こどものイベント 日本画を描こう!」を実施しました。果物や野菜、花などのモチーフを前に、子どもたちが日本画に挑戦しました。滝川ミュージアム・ティーチャーによる指導と、当館ミュージアム・ボランティアの方々のご協力のもと、子どもたちは複雑な日本画の制作過程をひとつひとつクリアし、最後は立派な作品を仕上げることができました。

(飯尾由貴子／当館学芸員)



橋本眞次氏によるギャラリー・トーク



稲賀繁美氏による講演会

「昭和モダン 絵画と文学1926-1936」 記念講演会

11月10日、「昭和モダン 絵画と文学1926-1936」展の記念講演会を開催しました。講師は東洋大学教授の和田博文氏。和田氏は、昭和初期、都市モダニズムの時代の文学を、当時の文化状況の幅広い調査をふまえて研究し、数々の著作、論考を発表しています。また、今では入手困難な当時の雑誌や書籍の復刻など基礎資料の編纂と刊行も積極的に進めており、今回の展覧会に関わる芸術や文化についてお話しいただくのにふさわしい研究者です。

演題は「美術と文学の交流」。講演は前半と後半に分かれ、前半は当時のモダニズム画家たち、東郷青児、古賀春江、阿部金剛らを中心としたお話でした。当時刊行された画集において古賀が絵の自作解題として発表していた詩作品を絵画作品とともに読み解き、また、阿部金剛のモダンな芸術家ぶりを資料からうかがうなど、絵のイメージとテキストの双方から先鋭的な芸術のあり方が



講演する和田博文氏

論じられました。

後半は、芸術と飛行機についての話。展覧会出品作の1点、詩と写真と版画を組み合わせた恩地孝四郎の斬新な詩画集「飛行官能」をページごとに分析し、当時の飛行機文化の状況にも触れながら、飛行機によって可能になった視点や新しい感覚が作品化されている様子を解き明かす興味深い内容でした。

(速水 豊／当館学芸員)

新収蔵品紹介 「信濃橋画廊コレクション」を中心に 出品作家による対談

10月27日(日)、コレクション展Ⅱの特集展示「新収蔵品紹介『信濃橋画廊コレクション』を中心に」(7月6日～11月10日)の出品作家である平田洋一さんと福岡道雄さんによる対談を開催いたしました。

お二人はいずれも、1965年の信濃橋画廊の開廊記念展「20人の方法」に出品。以後、毎週のように信濃橋画廊に通い、画廊主の山口勝子さんから揃って「皆勤賞」の立派な毛布を頂いたこともあるとか。そんな楽しいエピソードも交えつつ、50年近く前のお二人の作品のこと、また美術といえば団体展という風潮の中、肩肘を張らねば現代美術などやってゆけなかったという時代の状況など、話題はあちこちへと脱線に次ぐ脱線を重ね、しかし、いわば関西の現代美術開拓者世代であるお二人でなければ語り得ない深みのある内容ばかり。この、ゆるやかで自由、かつ深く濃い、という雰囲気こそ、いかにも信濃橋画廊らしいものであったかもしれません。お集まりくださったみなさんからは、ぜひ若い世代の作家に聞いてもらいたいお話だったという声も聞かれ、まさに信濃橋画廊のようなギャラリーこそが世代を超えた語らいの場として機能していたことにも、あらためて気づかされました。

なおこの対談は、信濃橋画廊(1965～2010)の活動に関する調査・研究活動の一環として、財団法人ポーラ美術振興財団のご助成により実現することが出来ました。この場を借りてあらためてお礼申し上げます。

(江上ゆか／当館学芸員)



平田洋一さん(左)と福岡道雄さん(右)

●——編集後記

●あけましておめでとうございます。本年も兵庫県立美術館と『ART RAMBLE』をどうぞよろしく願っています。
●新年早々となる本号は、橋本関雪をめぐる西原大輔氏の刺激的な論考をはじめ、特別展とコレクション展、そして「チャンネル4」に「神戸ビエンナーレ」の4本立てで駆け抜けた怒濤の2013年後半を振り返る、盛りだくさんな内容でお届けいたします。
(江上)

兵庫県立美術館
quarterly report
ART RAMBLE
VOL.41

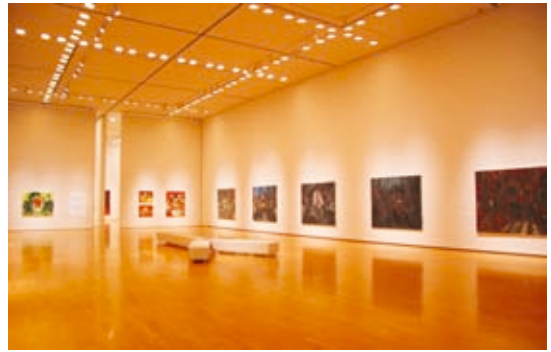
2014年1月5日発行
編集・発行:兵庫県立美術館
〒651-0073
神戸市中央区臨浜海岸通1-1-1
印刷:株式会社岸本印刷所

ダブル 横尾忠則W個展

出原 均



横尾忠則現代美術館会場風景



当館会場風景

美術館の周縁

駅や美術館のチラシのスタンドに、夏目漱石を描いた絵が真ん中の円に収まり、その周囲を同心円状に赤い文字の配されたチラシがあなたの目に入る。あなたはなんのチラシだろうといぶかって手に取ってみると、横尾忠則現代美術館での展覧会「横尾忠則 肖像図鑑」のタイトルがそこに記されている。内容をもっと詳しく知りたくて裏面を見たら、おかしなことに、こちらも表面とよく似たデザインで、ただ、中央の円内は噴火する火山の絵、周りの文字は青に変わっている。実は、裏面だと思っていたのも表面だったわけである。このチラシは通常の倍の大きさで、それが二つに折られてあり、折りこまれた面が裏である。横尾忠則現代美術館の展覧会だけでなく、兵庫県立美術館の展覧会「横尾忠則 感応する風景」のチラシも兼ねているのだ。折られた面を開けると、それぞれの展覧会の詳しい情報が載っている。

※

前回、前々回に引き続き、今回の神戸ビエンナーレにも兵庫県立美術館が参加することになり、葦館長の発案によって横尾忠則展を開催することが決まったのが昨年秋。横尾忠則現代美術館（以後、横尾美術館と称する）が同時期に開催する展覧会と合わせてダブル個展とし、神戸ビエンナーレを盛り上げるとともに、開館して一年に満たない横尾美術館をビエンナーレに繋げて広く周知させようという意図なのだ。この展覧会を、数年前に「冒険王・横尾忠則展」を担当した私と岡本弘毅学芸員が再度協力して企画することになった。

展覧会のテーマは、横尾忠則による風景画。横尾美術館の展示内容はその時点ですでに決まっており、横尾さんが描いた様々な肖像画を並べるといった内容だったので、肖像画と同様に基本的なジャンルたる風景画を選択することにした（一つの展覧会を二つの美術館で開催する案は、両館の開催時期がいくらかずれていることもあり、最初から考慮されなかった）。昨年、横尾さんから当館に寄贈された「日本原景旅行」シリーズの現存作品を公開すると同時に、ここ10年余り描いてきた「Y字路」シリーズを、当館で都合3回行った同シリーズの公開制作の成果も含めて紹介する機会を設けたという思いもあった。

会場となるギャラリー棟内のギャラリーは、縦に長い、巨大な箱である。それを可動式の壁によって4つの部屋に分割し、箱の長辺の中央あたりに入口を設け、その最初の部屋から残り3つに直接入るといった空間構成は、当初から構想していた。Y字路の部屋は、ギャラリーのほぼ半分の広さを確保し、大作をゆったりと展示することも当初の案である。横尾美術館の「肖像図鑑」展は『奇縁まんだら』や『日本の作家222』の原画など、小さいサイズの作品が中心で、かつ、油彩、ポスター、イラストなど、バラエティ豊かな展示になる

と聞いていたので、それとは対照的な空間を心掛けた。二つの個展が内容だけでなく、会場の構成においても異なれば、その違いによって相互の魅力が増すだろうと考えた。また、出品内容がまったく異なる方が、作品の取り合いがほとんどなく、両館の協力体勢上も都合がよい。実際、出品リスト案を互いにつきあわせると、ダブっていたのはわずか1、2点だったので、調整がしやすかった。

両館は、本館・分館という関係から、常日頃様々なやり取りを行い、互いに協力しあっている。上の岡本・出原の二人は、横尾美術館の学芸員を兼務し、所蔵品を中心に両館でクロスする業務を処理したり、連絡役をこなしたりしている。今回、横尾さんのダブル個展ということで、いままで以上にやりとりが増えることになった。なによりも、作品の貸し出しの業務が大きかった。当館の横尾作品を横尾美術館に貸し出してきたこれまでとは違って（本館・分館の関係なので、他の美術館への貸し出しとは違うのだが、ここではわかりやすく呼ぶ）、今回、横尾美術館に貸すよりもずっと多くの作品を同館から借りることになった。様々な事情で、出品作のほとんどを両館の所蔵品（横尾さんからの寄託を含む）でまかなうことになっていたからである。作品調査から始めて、貸し出しや他所への作品集荷についても助けられたり、助けたりしてきた。冒頭に述べたチラシもこうしたもののひとつである。ポスターの製作、広報活動なども含め、あらゆる面で関係が深まったのはよい機会だったと思う。

実は、関連イベントにおいても相互協力することになっていて、11月2日（土）に横尾美術館での横尾さん、瀬戸内寂聴さんの対談イベントに続き、翌日、当館でも横尾さんの講演会を開く予定だった。しかし、これは、横尾さんの体調不良によって実現できなかった。同じ理由で、今回の展覧会のための新作の制作が中断に追い込まれ、出品できなくなったのは残念だったが、これも仕方がない。それでも、まだ体調が芳しくない横尾さんが最終日に展覧会を訪れてくれたのはとてもありがたかった。実は、その日、横尾美術館でのイベントに顔を出すために神戸に来られたわけで、これも両館の相互協力の賜物といえるのかもしれない。

（ではら・ひとし／当館学芸員）

横尾忠則 感応する風景
2013年10月1日-12月1日 兵庫県立美術館ギャラリー棟3階ギャラリー
横尾忠則 肖像図鑑
2013年9月28日-2014年1月5日 横尾忠則現代美術館